

東洋学文献センターにおける

中国関係データベースの作成

東洋学文献センター(人文科学研究所)では、手作業で編集していた『東洋学文献類目』を1981年度版より電算機を利用して作成するようになった。その後、更に、自動簡体字入力・繁体字出力システムの開発により事務の能率化が進み、近年は類目作成の余力で現在、中国学関係の三データベースを構築中である。以下、その概要を説明する。

① 人文研所蔵中国書目録データベース

従来より編成している人文研カード目録では著者、書名の画数からしか検索できないなど少々不便であった。このデータベースでは、書名、副書名、著者名、叢書名等の繁体字項目、画数項目のみならず、当用漢字、拼音、四角号碼の項目を作り、いろいろな角度からの検索を可能にした。来年1月より、文献類目データベースと共にセンター閲覧室設置端末による代理検索サービスを開始する。

② 日本所見中国叢書目録データベース

『中国叢書総録』に記載のない叢書で日本に現存するものを、全国の主要漢籍所蔵館(京大、東

大、内閣文庫等(16館)の目録から拾い出した李銳清氏の原稿をデータベース化するものである。親データ、子目データの階層があり、それぞれの書名、副書名、著者名等について、やはり繁体字、画数、当用漢字、拼音、四角号碼の項目を設け、多角的に検索できる。

③ 近現代中国人物別称データベース

中国人は伝統的に別称をよく用いるが、近現代では政治的理由なども加わり、ひどい時は一人で百以上別称を持つ者も現れ、別称により人物を同定することがますます困難になった。そのため、センターでは人文研教官を援助し、多数の人名辞典伝記資料をもとに、近現代中国史研究者にとって大変な福音となる別称の総合的データベース構築に協力している。①・②同様、見出し、姓、諱、別称、籍貫、生没年等のデータのうち、見出し、姓、諱、別称には、繁体字、当用漢字、画数、拼音などの項目を設け、どこからでも検索できるように作られている。

(森賀 一恵)

「外国学術図書」の利用案内

10月1日より、昭和62年度補正予算(文部省配当)により購入した外国学術図書が利用できるようになりました。

本誌で既にご紹介したとおり、各学部の教官に推せんいただいた国際的に評価の高い図書を巾広く収集しました。総数約6,500冊のうち、整理が済んだ図書から順次、附属図書館2階・開架閲覧

室に配架しています。

貸出しは、他の開架図書と同様、図書館利用証を添えて1階メインカウンターへお持ち下さい。

多くの方々の積極的な利用をお待ちしています。

貸出冊数：5冊(他の開架図書とあわせて)

貸出期間：2週間(更新1回可能)